

スペイン戦争と日本人：ブルネテの戦闘と ジャック白井の戦士

川成, 洋

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

67

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

1988-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005293>

スペイン戦争と日本人

——ブルネテの戦鬪とジャック白井の戦死——

川 成 洋

はじめに

スペイン戦争に共和国軍の戦列で戦った日本人義勇兵ジャック白井が戦死して、今年でちょうど五〇年にあたる。彼のスペインでの活躍は、第一五国際旅団アメリカ大隊「エイブラハム・リンカン大隊」の政治委員、ステイブ・ネルソンのスペイン戦争回想録『義勇兵』⁽¹⁾、またスペイン出征前のニューヨーク時代については、当時ニューヨークで友人だった石垣綾子の白井の評伝『スペインに死す』⁽²⁾の二冊を中心にして、さらに多種多様な関係書⁽³⁾によって、ほぼアウトラインが判明しているが、惜むらくはとうべきか、いまだ曖昧な個所が多い。

それは、フィクションと事実の混合による政治的プロパガンダの産物に過ぎないからだといった、さかしらな批判を加えるつもりは毛頭ないが、思想に殉じた義勇兵を美化しがちなのは、生き残った人間の避けえない哀愍の念なのかもしれない、と述べておこう。

それでは、白井が「伝説の人物」として独り歩きをし、いつまでも「等身大の人間」として浮びあがってこない。その一例を挙げると、今年発表された論文には、未確認だがと断りつつも、白井が帰国して「日本帝国主義に反対する運動に関わっていた」⁽⁴⁾かのような記述がみられる。これは、勿論、全くのフィクションでしかありえない

し、こうした白井像を訂正するためにも、白井の足跡をできるだけ正確にたどるのが焦眉の課題となっている。

昨年一〇月、私は、マドリッドで開かれた「国際旅団結成五〇周年」記念世界大会に出席した⁽³⁾。そこで、リンカ⁽⁶⁾ン大隊の元義勇兵に再会した。その前年に、ニューヨークの「エイブラハム・リンカン旅団の元兵士の会(V.A.L.B.)」の事務所であっていたからだった。その中の一人で、小柄な黒人の元義勇兵ジエイムズ・イエイツとも再会した。

実は、イエイツに会って、もう一度確認せねばならない事柄があった。

それは、白井が戦死したブルネテの戦闘(一九三七年七月六・二六日)において、白井は「炊事兵」だったのか「機関銃兵」だったのか、という点だった。

イエイツは、ブルネテの戦闘で、食糧車の運転をしていた。共和国軍の前線総司令部は、ブルネテ村から北二〇キロにある、エル・エスコリアルに置かれた。食糧はすべて、エル・エスコリアルで料理され、食糧車で配送されていたのである。共和国軍がしかけた奇襲作戦であるブルネテの戦闘は、最前線で料理する時間的余裕もなく、それよりも敵に味方の位置が察知されないように、前線ではなるべく料理しないようにしていたのである。

イエイツの説明によれば、白井とはニューヨーク時代からの知り合いであったが、ブルネテの戦闘では、白井とは一度も会っていない。炊事兵としてエル・エスコリアルにも残っていないかったし、前線の食糧班としてイエイツらが運搬してきた食糧を受けとったわけでもなかった。ともかくも、ブルネテの戦闘で食糧車の運転手だったイエイツが、一度も、白井に会っていないなかったのである。

とすれば、少なくとも、ブルネテの前線では、白井は「炊事兵」ではなかったことになる。私は、イエイツと同じ任務に就いていた別の元義勇兵にあたった。イエイツと同じ意見だった。

白井は、「炊事兵」としてではなく、「機関銃兵」として戦死したのである。これは、白井を知るうえで、重大な点となる。スペイン戦争が、共和国陣営の戦列で戦う国際旅団の一兵士として参戦して、実戦部隊に配属されなかった場合、どう思ったであろうか。⁽⁸⁾リンカン大隊が初陣したハラマ河の戦闘で、白井は後方の炊事場で任務につ

いていた。だが、炊事場は、前線応急手当所でもあった。初陣の初日に、大隊の約三分の一の死傷者を出し、それらが前線応急手当所、つまり炊事場へ後送されてきたのである。阿鼻叫喚の応急手当所といっても過言ではないだろう。

白井が、炊事兵なのに「ファシストどもを撃ち殺してやる」などと言ったといわれているが、こういう類いの言葉は、単なる日常上の言葉にすぎず、とりたてて白井の政治的信念を物語るものでもない。

ともあれ、ブルネテの戦闘のコンテクトの中で白井の戦死の実状を私なりに述べてみたい。⁽⁹⁾

(一)

一九三七年七月初旬の時点で、共和国軍はすでに防御と反撃という点では十分にその能力を発揮してきたが、フランコ軍の主力部隊に攻撃をしかけたことがなかった。そこで、グレゴリ・イワン・クリーク將軍を中心とする、ソ連の軍事顧問団とスペイン共産党の軍事専門家たちによってブルネテの奇襲作戦が立案された。この作戦には、共和国軍からすれば次のような戦略目標があった。フランコ軍によるゲルニカの爆撃と制圧（三七年四月二十六日）、バスタの首都ビルバオの陥落（六月一九日）、さらに日程にのぼっていたビルバオの西方のサンタンデルへの攻撃などフランコ軍の北部攻略作戦を牽制するためであり、また、フランコ軍のマドリッド包囲軍を北西側から遮断するためでもあった。

共和国軍は二個軍団編成となり、その最高指揮官にマドリッド防衛評議会議長のホセ・メナント・ミアハ將軍が任命された。軍団、師団の指揮官は、ただひとりを除いて全員が共産黨員で占め、旅団の指揮官で共産黨員でない場合には、旅団付政治委員が一部始終監視することになった。

白井らが所属する第一五国際旅団はガル將軍の指揮のもとで若干の編成替えが行なわれた。新編成は二個連隊だった。第一連隊は、ディミトロフ（ドイツ人）大隊、二月六日（フランス人）大隊、スペイン人第二四大隊の三個

大隊編成となった。このスペイン大隊の国際旅団への編入は、これが初めての試みだった。以降、国際旅団の外国人義勇兵の損失を補充するために、スペイン人部隊が、大隊単位、中隊単位、小隊単位で、国際旅団に編入されるようになった。だが、このスペイン大隊の戦力は全く未知数だった。兵士はあまりにも若すぎるが、あまりにも年を取りすぎているのがどちらかであり、マルティネス大隊長は五〇歳位の職業軍人だったが、タイコ腹の下にピストルのベルトをかけていて、どちらかといえば、実戦向きのように見えなかった。

第二連隊は、イギリス人大隊、リンカン大隊、ワシントン大隊の三個大隊、予備部隊にマッケンジー・パヒノ大隊、つまり、カナダ・アメリカ人大隊と呼ばれる編成だった。

ともあれ、共和国軍は、二個軍団、五個師団、総員五万、飛行機一五〇機、戦車二二八台、野砲一三六門の陣容だった。

七月二日、アルバレス村を発ったリンカン大隊は、マドリードの北側を大き迂回し、フランコ軍の包囲陣を北西側から攻撃することになっていた。それもほんのしばらく輸送トラックに乗っただけで、その後は全て行軍となった。行軍は、敵の偵察機を警戒して、夜間だけに限られた。エル・パルドと呼ばれるグアダラマ山脈の山麓にある西洋杉の森を通過した。この森は、かつてブルボン王家の狩猟用離宮のあったところだった。

七月四日、アメリカ独立記念日。リンカン大隊とワシントン大隊とがスペインではじめて出会った。両大隊が合同して独立記念日を祝うためだった。リンカン大隊からは白井と二人の部下、ワシントン大隊からはルー・ツロトニクらが、一緒に特別料理をつくった。通常の二倍の量のタバコの配給と、チョコレートのおまけつきだった。アルコール類はもちろん禁止だったが、特別料理は兵士たちの心をなごませ、リラックスした気分させた。今夜は両大隊で出陣祝いとはいかないものの、楽しく時を過せると期待していたが、「両大隊、出発用意」という命令がくだった。数時間後、両大隊は行軍を開始した。翌五日、バルデモリヨ村付近の農園で野営した。この辺は裕富なマドリード市民の週末用の別荘や日曜野菜の耕地などが散在するのどかな所だった。だが、戦争のためこの辺も荒れ果てていた。別荘のプールにはどろっとした緑のコケが生えていた。周囲は、松と杜松のこんもりとした森が

あつた。

彼らが利用した農園を「真珠の門」と名づけた。

翌七月六日午前二時、両大隊に出撃命令が下達された。攻撃が開始する六時三〇分までに所定の部署につくことになっていった。先発はワシントン大隊だった。三〇分以内に両大隊は屋根の下の出発地点に集結しなくてはならなかった。

目的地は、谷を見下せる小高な丘になっていた。

だが真暗闇のなかで、手探りで前進せざるをえなかったため、途中で道に迷い、一時間も遅れて目的地に着いた。六時三〇分、作戦通り、共和国軍の砲撃が開始された。爆撃音は山岳地帯の静寂さを破り、溪谷の谷底からもこだましてきた。グアドラマ溪谷は、さながらブリズム色にいろどろられ、南の方へ伸びていた。その溪谷の平らかな地点をぬうように戦車が進んでいった。

リンカン大隊が丘にあがって前方を見ると、五、六キロ前方にある、ピリヤヌエバ・デ・ラ・カニャーダ村が砂塵と炎につつまれ、無気味な色合いをみせていた。共和国軍機が低空飛行し、要塞化したカニャーダ村を爆撃していた。はるか南西方向にも、灰色の煙が渦巻き状にまいあがっていた。共和国軍機によってキホルナ村の敵の弾薬臨時集積場が爆撃されたからだだった。はるか遠くから、機関銃やライフル銃の連続音が聞こえてきた。それはスレート屋根にまい落ちる無数の雨の音のようだった。

やがて不快な焦熱地獄のような熱風が、溪谷の底から湧きあがってきた。小高い丘から平原にたどり着くまでに水筒が空になった。

リンカン大隊が肉眼で見ても、戦闘の展開はそれほど味方に有利とは思えなかった。戦車と歩兵はすでにカニャーダ村を包囲し、強力な攻撃をしかけていたが、まだその村を制圧していなかったからだ。頭上では空中戦がくり広げられていた。

伝令がやって来た。ガル將軍からの命令書をもって来た。カニャーダ村の掃討作戦を敢行せよという内容だった。

た。先発のワシントン大隊とイギリス大隊のあいだの間隙をうめるのが、リンカン大隊の任務だった。しかし、最初の作戦は、カニヤード村を迂回して、モスキート・クレストと呼ばれる頂を中心とするロマニョス台地へ向い、フランコ軍が防衛態勢を整える前に、その台地を制圧してしまうことだった。しかしながら、ガル將軍がみずから、この最初の作戦命令を撤回してしまったのである。

国際旅団の中で最強のデIMITROフ大隊が先陣を張り、リンカン大隊は長い斜面を突進し、灼熱の平原を突き切った。平原を越えるとまた丘だった。平原と丘の連続。空から見れば、波打っているような地勢だった。しかも平原には小さな溝が幾重にも走っていた。こういう場所は、遮蔽が多く、進攻する歩兵部隊には都合がよかったが、それだけ前進するのに時間がかかった。

地図上に青い線で示されているグアダラマ川の支流は、夏期には乾燥した川床を露やにしていた。皮肉というべきか、グアダラマとは、アラビア語で「乾いた川」を意味していたのだ。リンカン大隊が目的地のカニヤード村に着く前に、のどの渇きで意識がぼっとしていたのがかなりいた。

カニヤード村は、ゆるやかな斜面の頂のところにあった。低く密集している民家は、厚いレンガ造りだったのだ。フランコ軍にはとても都合のよい守備用の建物となっていた。敵の機関銃座が教会の鐘つき塔にそなえつけられ、四方八方へ射ちまくっていた。また、この塔からは、三七ミリ砲も火を吹いていた。この塔はドイツ・コルドル兵団の將校が指揮していた。

一二台のロシア製戦車が、まずこの塔に集中砲火をあびせ、歩兵の掩護を行った。第五ロシア戦車大隊の技術指導部付のロバート・グラドニックによれば、このドイツ軍將校は捕虜としてとらえられ、ドイツ軍の戦車戦術について供述したのち、フランコ側がおさえている共和国側の捕虜と交換されたという。

リンカン大隊は、ひざまで伸びている小麦畑の中を進み、目標とする四〇〇メートルの手前で止った。フランコ軍の守備隊が必死の抵抗を行ったからだ。ヘルメットや銃剣を使って地面を掘り、身を隠す場所を確保しようとした。太陽に焼かれた大地はとても硬く、まるで石のようであった。窪みなど掘れるはずもなく、どこにも身を

隠す場所はなかった。リンカン大隊は着剣して、村のはずれの一〇〇メートルくらいの所まで前進した。

灼熱の太陽、気温は三九度を少しオーバしていた。

手元に残っているわずかながら水も、水冷式のマキシム機関銃に使わねばならなかった。銃身が焼けてしまうからだった。

水の補給、これが兵站部の最重要任務だった。彼らは水を求めてかなり後方へ戻ったが、ついに水を見つけることができなかった。

昼頃までに、ガル將軍麾下の六個大隊は、カニャーダ村の包囲網を完成させ、民家の外側の周囲に重砲撃を加えた。だが、攻略には思いのほか手間がかかった。

太陽が西方に傾いた。貴重な時間が一刻一刻と過ぎ去った。共和国軍の主力部隊は、約五キロ離れたブルネテ村やキホルナ村を包囲攻撃していた。

夕方の六時頃、旅団司令部の伝令が、即座にカニャーダ村を猛攻撃せよという命令をもってきた。リンカン大隊からは、先の休憩基地で大失態を演じたポール・バーン指揮の第一小隊が先発隊と決まった。第一小隊が出撃しようとしたとき、デIMITロフ大隊が村の反対側から攻撃をしかけ、激しい銃撃戦が始まった。

この動きに刺激されて、リンカン大隊とワシントン大隊は有刺鉄線を切断し、敵の塹壕を急襲した。敵の守備隊はあわてふためいて民家へ逃げ込んだ。攻撃部隊は村の中心部へと殺到した。あまりにも迅速な行動だったので、村の中心地であるマヨール広場付近であやうく同志射ちをするほどであった。

この村の中心部から追い出されたフランコ軍、正確にはフアランへ党民兵隊員は、一二人余りの村人を人質にして、村から南へ三〇〇メートル離れた地点で出撃準備中のイギリス人大隊の陣地へ向かった。その直後の様子は、イギリス人義勇兵ジャック・ロバートによると次のようである。

突然誰かが叫んだ。「射撃中止！ 村から人がくる」。われわれは道路の方を見た。約二五人の男、女、そし

て子供だった。先頭は、一〇歳くらいの少女だった。その子のうしろには、中年の女性、一四歳くらいの男子、数人の老人が続いた。それ以外は青年たちだった。彼らが近づきながら、叫んだ。「同志たちよ！同志たちよ！」

避難民だと判断したわれわれは、合図を送り、こちらに進んでくるよう叫んだ。彼らに最も近いところにかディフ出身のパット・マーフィがもし武器をもっているなら下に置くようにと言ったとたん、村人たちの背後から機関銃が火を吹いた。今まで盾につかっていた老人、婦人、子供たちを払いのけたファシストどもは、われわれの真只中に手榴弾を投げつけたのだ。悲鳴をあげる人質が四方八方へ散った。人質の体にしばらくつけていた手榴弾が銃弾で炸裂し、数人の婦人が即死した。数分間はまさしく修羅場だった。

手榴弾の炸裂音、銃声、子供や婦人の悲鳴。これらは今だ私の耳にこぶりついている。だが、一〇分後、全てが終った。ファシストどもが死体となつてころがっていた。味方であれ敵であれ、負傷者を救出しなければならなかった。一人のファシストがうめき声をあげていた。勇敢な若い中隊指揮官のビル・メレディスが、彼をだき起こそうと身をかがめたとたん、ファシストのピストルの弾がビルの心臓を射ぬいたのだった。

この卑怯な作戦でイギリス人大隊は怒り心頭に達し、カニャーダ村になだれ込んだ。今や燃えさかる民家が夜空に赤々と映えていた。まるで地獄のようであった。

干し草の山や家畜小屋に隠れひそんでいる捕虜を残忍な殺し方で殺害するのではないかと懸念したイギリス人大隊長のフレッド・コープマンは、部下をこの村から却去させ、他の大隊に掃討作戦をまかせた。

一方、共和国軍のエンリケ・リステル將軍麾下の第一師団は、砲爆撃の掩護をうけて攻撃を開始し、正午にはブルネテ村を制圧してしまつた。また、エル・カンペシーノ指揮の第四六師団は、キホルナ村を猛襲し、二日後、この村の攻略に成功した。

ともあれ、緒戦においては、共和国軍は敵陣を突破し、作戦は見事に成功した。

この初日の戦闘をブルネテの南、セビリヤ・デ・ラ・ヌエバという村に駐屯中のフランコ軍を取材していた『東京朝日新聞』の坂井米夫記者は次のように記している（『ザアガボンド通信』一九三九年、改造社）。

ヤグエ、サリケット、バレーラ三將軍の前線司令部を歴訪してナバルカルネロから愈ブルネテ戦線へ。セビリヤ・デ・ラ・ヌエバという村で凄絶な空中戦を見る。真ッ黒は煙を吐いて墜ちる機、白煙をスーッと曳て急降下するように墜ちていく機、見る見る火焰に包まれて墜ちる機——一機の後から一機が追い、その後からまた他の一機が追いかける。墜ちると凄まじい黒煙が焰とともに上って、地上に片手つきながら見ているわれわれの所にまで震動が伝わってくる。あっやられる！と思うとはたして無雑作に墜ちる。あれ程たくさんいた飛行機が散り散りになって、紺碧の空に無数の白い花が咲いたような高射砲弾の炸裂。ブルネテ村落は目の前に見えるが、もうここから先へは進めない。傷ついたモロッコ兵が続々後送される、乾き切った陣地と両軍の砲撃でグアダラマ連山が見えない程濛々たる土煙り、ここを突破したらマドリードは片つくのではないかとやきもちするが、予備がほとんどいなのでそう思いきった作戦がとれないらしい。ブルネテの村はさかんに燃えている。

七月七日午前七時までに、カニャーダ村は完全に制圧された。昨晩の戦闘でかなり消耗していたものの、リンカソ大隊の兵士たちは自らの戦果に大いに満足していた。スペインで敵の陣地を奪取したのが、これがはじめてだったからだ。八〇〇人のファランへ党民兵隊大隊とフランコ軍の第一三師団からの補充部隊の全滅、二〇〇人以上の捕虜、多くの機関銃、何百丁のライフル銃、一〇五ミリ砲一基、対戦重砲三基などの収穫があつて、まさしく「我々は突破する」のスローガン通りの作戦だった。

今や日影の中でまどろむ者、敵の食糧庫から徴発してきた赤トウガラシ入りのソーセージをムシヤムシヤ食う者、捕虜が収容されている村はずれの納屋のすきまから覗く者など、さまざまな束の間の午前中の休暇を楽しんだ。彼らははじめて直に見た捕虜に失望したようだった。捕虜は、アメリカ共産党機関紙『デイリー・ワーカー』

の風刺マンガとは全く異っていた。捕虜はどうにもならない程の体たらくだった。汚く、とてもおびえていた。

埋葬部隊があたり一面に散在する戦死者を埋葬した。リンカン大隊は四〇人の犠牲者を出した。負傷者も三、四〇人もいた。ワシントン、イギリス人両大隊の兵力損失は、リンカン大隊とほぼ同規模であった。

正午に、旅団司令部から、今までと逆の作戦命令が伝えられた。増援部隊が到着するまでこのカニヤダ村を確保し、その後ブルネテ村近くの主力攻撃部隊と合流するために南へ移動し、モスキート・クレストへ向って東へ進撃せよ、という内容であった。この命令をうけて間もなく、第一五国際旅団がカニヤダ村をあとにした。この頃、モスキート・クレスト方向から敵の砲弾が飛着するようになった。彼らは東へ進み、グアダラマ川へ向かった。はるか遠方からよく見通せる田園地帯を進んだ。後方の騎馬部隊は、歩兵の行軍ののろきに苦言をあびせていた。

先陣はワシントン大隊だった。彼らはリンカン大隊の助言を無視して、縦列編隊で行軍した。突然、フランコ軍の爆撃機が地上すれすれの低空飛行で爆撃してきた。散開する余裕もなく、ワシントン大隊の二〇人の兵士がふっ飛ばされた。死体から煙がたちのぼり、黒こげになっていた。これ以降、ワシントン大隊は散開して行軍するようになった。

グアダラマ川に接近したとき、前進を阻止しようとして敵の待ち伏せ部隊が散発的に射ってきた。アメリカ人兵士は、兵士というよりむしろハンターのように、待ち伏せ部隊を追い払ってしまった。

それにしても第一五国際旅団は、この川に到達できなかった。かすかな川のせせらぎを聞きながら、喉の渇きに耐えねばならなかった。大隊、中隊、小隊の間の相互連絡がとだえてしまった。だが、翌朝早く各部隊は態勢を整えることができた。

この日、大部分の兵士は朝食だけだった。夕方遅くなるまで、食事はなかった。エル・エスコリアルからの食糧車が最前線に到着しなかったし、実際に炊事をする余裕などなかった。各自は支給された携帯用食糧を食べ継いでいた。堅パンと二ポンドのアルゼンチン・ビーフの缶詰だけであった。こうした食糧事情は、日がたつにつれて、増々悪化していった。即席の炊事場や食糧車が絶え間なく攻撃されたからである。炊事ができる場合でも敵機

が飛来する音を聞くと、炊事兵が大鍋を火から平らな地面におろし、それに蓋をして、一目散の各々の「きつねの穴」へ逃げ込むこともしばしばだった。また、敵の榴散弾の破片入りのシチュもあった。食糧の輸送用に確保していたロバやラバの犠牲も著るしく、結局、兵站部から食糧班をあらたに編成し、前線への食糧補給をかるうじて保っていた。

七月八日早朝、ロシア製の戦車がグアダラマ川の浅瀬をあっという間に渡河し、対岸の藤の茂みや若木を踏み倒して進んで行った。第一五国際旅団の歩兵部隊は、水筒を水の中につけたまま戦車の後に続いた。約一キロ先が、モスキート・クレストの頂だった。斜面は西洋杉（いばぎ）が群生していた。かつてこの辺は、スペイン随一のアルバ公爵専用の狩猟場だった。雉（けい）は下生えから舞い上り、うさぎは地面から頭を出していた。この公園のような所にも、敵の狙撃兵が身をひそめて待ち構えていた。

リンカン大隊の偵察部隊が敵の狙撃兵を追い散らした。まるでキツネ狩りのようなものだった。敵はライフル銃、携帯用食器セット、毛布などを放り出して、脱兎のごとく逃げ出したのだった。

森林での進撃は予想以上に手間取った。前進は一時間に約一〇〇メートル位だった。視界がさえぎられ、群生するブッシュに足がとられからだった。

味方の戦車部隊が屋根の一角に到着した。だが、その機動力をフル回転させて敵の戦線を突破するどころか、下から登ってくる歩兵部隊の到着を待つだけで、そのうち、今きた道を引き返してしまった。その屋根から数百メートル離れた峡谷に集結した共和国軍の砲兵部隊も、手持ちの四五ミリ砲弾をすべて射ち尽して、後退してしまっただ。頂へ攻撃は速攻作戦しかなかった。しかし、何ら共同作戦を伴わない速攻は、いわば自殺行為と等しかった。しかも、歩兵部隊は通信と兵站の両部隊からはるか離れていた。将校たちも、自らの部隊の位置を地図で確認できなかつた。というのも、同じように見える峡谷や断崖が多すぎ、特定できなかったからである。木立ちと森との区別のつかない地域での位置確認は至難の業だった。

前線応急手当所も、四キロくらい後方にあった。実際に負傷者も、手当が遅れたために致命傷になることもあつ

た。
熱さは窒息させる程強烈だった。まるで空中から酸素が消えてしまったかのようなようだった。熱さと渇き、これが最大の敵だった。

午後になって、空になった水筒をかき集めて水を取りに川へ行った。朝、渡渉した浅瀬はすでに乾燥していた。水を待望んでいた兵士たちは大いに落胆し、うつろな目をして、石のようにじっとおし黙っていた。

この日は、今までのなかで最も暑かった。上方へ続く深い峡谷を利用して、第一五国際旅団の兵士はさらに前進した。ワシントン大隊が中央部を受けもった。マクロピッツ大隊長は、自動ピストルをふりかざし「マドリードへ」と激を飛ばした。

リンカン大隊は二手に分かれ、政治委員のネルソンは左翼を、黒人の大隊長のオリバー・ローが右翼を指揮した。リンカン大隊が約一〇〇メートルほど前進した。右翼から進んだオリバーの部隊は敵の狙撃兵と遭遇した。ひとりの兵が前方の下生えの茂みを指してオリバーに、ほらそこいる、と叫んだ。オリバーが確認しようとして振り向いたその瞬間、彼の胸に一発の弾丸が当たった。彼はその場に倒れた。即死ではなかったが、致命傷だった。まもなく彼は、戦友たちに見守られて息を引きとった。

大隊長オリバーの戦死はリンカン大隊を深い悲しみに包みこんだ。この黒人の大隊長の戦死が白井に決然たる態度をとらせたのではあるまいか。あるいはオリバーの仇討ち、と考えたかもしれない。白井の上官であるアル・タンスが私に言ったように、「白井はオリバー・ローとともに仲が良かった」からだ。白井にはオリバーはかけがない人間だった。はっきりと大穴の開いた心を埋めには、果敢に戦うしかない。スペインにやって来た本来の目的通りに行動するより方法がないのだ。白井が機関銃中隊に転属を願い出たのも、ハラマの戦場で機関銃中隊の指揮官がオリバーであり、彼のぬくもりを感じるためだったのではあるまいか。

その間、ワシントン大隊は着実に尾根を目ざしていた。フィリップ・ディトロ中隊長が一五人の部下をかきあつめ、頂上を目ざして突撃した。幾条にも重なっている尾根の一端にたどり着き、モスキート・クレストのほんの手

前一〇〇メートルの地点に到達した。この尾根は、遙か遠くから眺めれば、「途徹もなくでかい黒い丘」にみえるモスキート・クレストへと連がっていた。最後の突撃に入ったが、当然、敵は機関銃を備えて待ち構えていた。デイトロ中隊は西洋杉いばらの樹を遮蔽物に利用して少しずつ前進した。機関銃弾に対する人間の意志の戦いだ。結局、前進も後退もできず、デイトロは大隊長へ増援依頼の伝令を使わした。部下を集結さすのに奔走していた大隊長も、中隊の伝令に「戦車がかかるまでその陣地を確保せよ」との命令を伝えるだけだった。

デイトロ中隊のいる尾根の一つ後方の尾根から一台の戦車が一発射っただけで、姿を消してしまった。一五人のうち、八人が戦死したデイトロ中隊は暗闇を利用して自力で脱出するより方法がなかった。

この日の攻撃でアメリカ人の両大隊がいやという程知らされたのは、昨日まで彼らが追撃してきた残兵の他に、強力な増援部隊をえた敵がほとんど難攻不落の陣地を構築していたということだった。今やアメリカ人の両大隊に共和国軍から支援部隊が到着しないのは、師団司令部の説明では、攻撃に戦力を投入しているからということだった。七月九日の戦闘は、モスキート・クレストの下に陣取っているアメリカ人の両大隊やその他の大隊への攻撃で始まった。低空飛行で襲来してきたハインケル機やフィアト機が、大量の爆弾を投下していった。そのうえ、敵の砲撃が今まで以上の領域をカバーするようになった。もはや両陣営の戦力と火力においては均衡状態はやぶれてしまった。にもかかわらず、モスキート・クレストへの第一五国際旅団の果敢なる攻撃は続けられた。

七月一〇日、第一五国際旅団は、モスキート・クレストの下に広がる前線を頑強に維持した。だが、この時間がかえってフランコ軍にさらに有利に作用した。反攻作戦の態勢を整える時間を与えることになったからである。臼砲がおそろしい程正確に猛威をふるっていた。高速の砲弾が樹木をなぎ倒し、根元に隠れていた兵士がその倒れた樹の下敷になった。夜になると、モスキート・クレストの頂上に陣取っていたモーロ人部隊が吠え声をあげていた。それは、まるでジャッカルジャコウネコの吠え声だった。とても無気味な、不吉な感じのする声だった。

七月十一日、ついにフランコ軍は制空権を握った。本格的な反攻作戦を開始したのである。第一五国際旅団はモスキート・クレストの頂上制圧作戦を断念しなければならなかった。この日の様子は、戦死したオリバー・ローの

代わりにリンカン大隊を指揮したネルソンの『義勇兵』によると、次のようである。

一日の朝、敵機はリンカン大隊めがけて百発もの爆弾をどっと投下した。また、もっと小型の飛行機も襲来し、手榴弾を投下し、機銃掃射をおこなった。

陣地の後方には、なんの変哲もない雑木林に対戦車砲が二門あったが、敵機はそれに気づかなかった。

電話が鳴った。戦車が八台、丘をおりてくる。小型だ。そのあとに、少なくとも歩兵一個大隊が続いている。

戦車が近づいた。まったくさまたげるものがなかった。ほぼ四五〇メートルくらいまで近づいてきた。二門の対戦車砲が火を吹き、先頭の戦車がぱっと炎に包まれた。二度目の一斉砲撃で、もう一台の戦車が進行方向からはずれて、狂ったようにくるくるまわった。残りの戦車は隠れ場を求めて小さな丘のかげへ走った。その丘の高さが足りず、どうしても姿を隠しきれない。

残りの戦車は、対戦車砲のわなにかかったことを知ると、先を争って丘の頂上へと逃げたが、逃げおせたのは、わずか一台にすぎなかった。

戦車が逃走すると、敵のモロー人歩兵部隊は停止して地面に伏せた。彼らはリンカン大隊の四五〇メートルのところをいた。しばらくすると、将校たちが立ちあがり、部下に前進を命じた。共和国軍は満を持して発砲しなかった。ファシスト軍は、空からの攻撃で陣地は徹底的にたたかれていて、と考え、しだいに自信を強めて進んできた。彼らはまったく用心していなかった。反撃を受けないものと思いきや、大声で叫びながら走ってきた。

私はレイ・スライルの機関銃のわきに身を伏せていた。「もう二〇メートル引きつけよう」とレイは額に汗を浮かべ、口もとのかすかな微笑をかみ殺した。「さあ、みんな、落ちつくんだぞ……ようしっ、それ撃て！」

六基の機関銃はファシストの波めがけて猛烈な銃火をあげせた。ライフル部隊は命令通りに、斜面の後方の兵士をねらい、一方、機関銃は、くぼ地に向かって走りつつ味方の陣地に近づいてくる連中をねらいつつづけた。

わがリンカン大隊は、ハラマの戦鬨の仇を討つことができた。

モロー人兵士は真っ赤な血のかたまりとなって前方にころがっていた。リンカン大隊は本当に「仇を討った」のだった。

それにしても、戦闘することすら、このカスティーリヤの灼熱の太陽のもとでは拷問に等しい。太陽はあまりにも強烈だったので、すべての物体が白色に変ったような錯覚をおぼえた。一種の「雪目」ならぬ「太陽目」というのだろうか。乾燥しきった草が、足に踏まれる度にガサガサと音をたてて折れ、その周りの土が舞い上った。

水集めの分遣隊が編成され、グアダラマ川の川床を必死となって掘りはじめた。約三メートルほど掘ると砂から水がしみ出て、ある程度の水たまりができた。その水は非常にどろっとしていてもくさかったが、「恵みの水」であり、ともかくも兵士の喉を潤わせることができた。

前線の兵士用の食糧もどこおりがちになった。たしかに兵站線ができていたが、夜昼となく攻撃にさらされていた。にもかかわらず、食糧班は前線兵士からひどく文句をいわれた。ロバを使えるときはロバの背に食糧をのせて味方の最前線へと登ってきた。だが、ロバはやはり見立ち、敵の攻撃の的となった。ロバが殺された場合には、食糧袋をかついで、ころんだり、走ったりしてようやくたどり着いた。塹壕の兵士たちは、食糧班が行きつ戻りつするのを待遠しく待っていた。

その日の午後はしばらく小康状態が続いた。最前線で激しい戦闘後は、何となく不気味で落ちつかない。戦闘の興奮がまた体のどこかに残っており、さりとて休憩もしたい、だが敵が態勢を備えて再攻勢をかけてくるのではとといった不安が前線の兵士を支配するものだ。

こうした状況で最も兵士たちを勇気づけ安心させるのは、食事だった。

夕方六時頃、夕食が下から運び込まれると誰もが期待していた頃、突如、フランコ軍が態勢を立て直して再攻撃してきた。今度の主力攻撃は機関銃部隊だった。応戦する側との激しい射ち合いが始まった。この直後、下の食糧車が、白井のいる機関銃中隊の部署に食糧をとどけようとやってきた。だがほんの少し手前で敵の機関銃弾のた

めに、もうこれ以上一步も前進できなくなっていた。空腹とどの渴きに苛まれつつ応戦する味方の兵士ともうこれ以上動きのとれない味方の食糧車、こうした状況下で、白井の運命が決まったのだ。ちやうどその直前、白井の上官のアル・タンズも現場に来ていた。その時の様子を、アル・タンズは、「私の言えるは、直接的な目撃談ですが」とことわりつつ、私のインタービューに答えてくれた。

アル 私たちは、リンカンとワシントン両大隊が陣地を築いている長い前線にやってきました。たまたま、兵站部の別の兵士が、機関銃座は大丈夫だと言ってきました。ところが、その直後、両陣営のあいだで、猛攻撃が開始されたのです。

戦闘が小康状態になるまで、その場に待機するよう伝令がとどきました。それで、私たちは坐って待機していたのです。やがて、ジャック白井が、俺行ってくるよ、俺こわくないから、といって飛び出そうとしました。ジャッキー行くな、もう少したったら、われわれも行くから、それまで待機しているよ、と誰も彼もが叫んだ。ジャック白井は、そうした叫びに無頓着だったのです。彼が飛び出して、ほんの二、三歩進んだとき、敵の機関銃弾が彼の頭を射ぬいたのです。

彼の頭ですが、頸部ではなく。
アル そう、頭、あるいは頸部です。ともかく肩より上の部分です。これが、ジャック白井の戦死の状況でした。

彼の戦死後、あなたたちは、彼の屍をスペインの大地に葬ったのですか。

アル そうです。夜になって、私たちはささやかな埋葬式をしました。ほぼ同じ時刻に戦死した七人の戦友と一緒に。

埋葬式をもっとくわしく話して下さいませんか。あなたたちは墓標か何かを建てましたか。

アル 墓標を建てました。私たちは、だいたい同じような墓標を建てました。例えば、ジャック白井の場合でい

えば、ジャック・シライ、ジャバーニーズ・アンタイ・ファンスト、彼の勇気をたたえて、一九三七年七月一日、というふうに。

—— 墓標の材料は何だったのですか。また、その場所をだいたい確認できますか。

アル 木の端を使いました。その翌日か、二日後、両アメリカ大隊は、他の陣地へ移動しましたので、その場所
は全く分りません。

はたして、ジャック白井は、その瞬間、何を想い、なんと叫んで絶命したのだろうか。
薄幸のもとで生をうけ、波瀾にとんだ、しかも孤独な三七歳（推定）の生涯をスペインで閉じたのである。

(二)

ジャック白井は、スペインで、このうえもなく幸せだったに違いない。

彼の三七歳の生涯は、このスペインでの半年間の生活のための、いわば助走のようなものだったとも思われる。人種差別も、過去の経歴も全く問題にしないスペイン。それが故に各々の能力が正當に評価され、それを十分に発揮できるスペイン。人間同志のぬくもりが肌でわかるスペイン。今までの白井にとって、このような生の充実を実感できた場所がスペイン以外にあっただろうか。生きていることを実感できるスペインで、白井はおのれの生命を十二分に燃焼できたのではあるまいか。スペインでの生活は、今までの失われた日々をたぐり寄せるようなものだったろう。

スペインでの白井像は、ニューヨーク時代と異り、ほほおしなべて「つねに笑顔をふりまく、陽気な男」となっている。すでに述べたように、生まれて初めて地獄のような戦場を転戦し、多くの親しい戦友を失い、また、反ファシズムのための義勇兵という理念からすれば大幅に逸脱した国際旅団の中で、さまざまな理不尽なことに出くわ

しながらも、不思議なほど明るい。

この明るさは、ニューヨークで参戦を決意した反ファシストの闘士としてよりも、自分の存在を確認できるスペインを「暗黒の中世に逆戻りさせようとする」フランコ軍から守りぬこう、つねに前向きでそれに挺身しようとする意識が働いていたためだろう。スペインにすべての希望を託することができたのだ。それ故彼は、共和国内部の政治的抗争や、他の多くの義勇兵が抱いた不満にも無頓着でいられたのだ。

彼が激戦になると、「ファシストどもを射ち殺すために」炊事場から離れると言ったのも、明確な政治性の指標にはならない。「反ファシズム」という言葉は、もはや陳腐なきまり文句にすぎないからである。

絶え間ない戦友の戦死や再起不可能な負傷を目のあたりにして、炊事兵だった彼の頭にどんな考えが浮び、心にはどんな感情が渦をまいていたのだろうか。自分のおかれている状況のもどかしいほどのいらだちで、いてもたってもいられず、「ファシストどもを射ち殺してやる」と言ったのではあるまいか。

明るく、固陋ころうにも近い戦友想いの優しさが、彼を炊事場を離れさせ、銃を握らさせたのではあるまいか。あるいは戦友の弔合戦のためかもしれない。あるいは屈辱感を払いのけるためかもしれない。

私は、白井の戦死直後のエピソードを二つ聞くことができた。

一つは、アル・タンスにインタビューする二日前、サンフランシスコで会ったリンカン大隊機関銃手のメル・アンダーソンからだ。当時、労働組合のオーガナイザーだったメルは、党から要請をうけて一九三七年一月にニューヨークを出港した。メルと白井の出会い、メルがスペインに到着して間もなくだった。それ以降、配属部隊が異なっていたが、戦友として親しい間柄が続いた。だが、戦場では、白井の出身地とか、その他個人的なことなど話す余裕は全くなかったという。事実、白井が日本人で、ニューヨークでコックとして働いていたということと以外何も知らなかった。孤児だったことも、恋人をニューヨークに残してきたことも、全く知らなかった。白井からすれば、スペインでこうした自分の過去を語る必要性も感じていなかったのかもしれない。

七月一日六時過ぎの戦闘で、メルの戦友のキューバ人兵士が戦死した。戦鳴が収まって、戦友と二人で、その

キューバ兵の屍を担架にのせ下に運んだところ、白井がそこに横たえられ、数人の戦友が頭をたれていた。非常に驚いた。あの不死身のような白井が斃れたからだ。合計七人の戦友の死体があった。あらゆる物質が不足していたスペインの戦場ではよくあることだが、それに戦友の形見分けの意味もあって、死んだ戦友が使用していたもので使用可能なものは、借用することになっていた。メルは、自分の靴がボロボロだったので、比較的新品で手入れのよかった白井の靴をぬがせた。だが、靴のサイズが全く合わず、白井の靴は、別の義勇兵が使うことになった。

メルが話の途中に、何回も、白井は「ビューティフル・ガイ」だったと言ったのが、とりわけ印象的だった。

もう一つのエピソードは、一九七五年九月にニューヨークで会った「リンカン旅団元兵士の会(VALB)」の事務局長のモウ・フィシマンからだ。彼もブルネテの戦場で右脚を負傷し、現在もその右脚は不自由である。モウによると、白井の戦死の知らせを聞きつけて、白井の部下だった二人の炊事兵がかけつけてきた。二人とも男泣きに泣いていた。その一人は、白井の頭をだきかかえて、この戦争が終って三人とも無事帰国したら、ニューヨークででっかいレストランを開いて、金持ち連中からパッチリ金をしぼり取って、貧乏人にはタダで食べさせよう、といったも言っていた白井が、どうして死んでしまったんだ、と号泣していた。この炊事兵は、一年後の一月、エプロ河の戦場で、最後の徹退作戦の敢行中に戦死した。もう一人の炊事兵も、白井の戦死した三日後、同じブルネテの戦場で戦死した。白井の埋葬に際して、誰からともなく、嗚咽と号泣がもれ、その声はいつまでも続いた、という。

このような埋葬は例外だった。前線で、いつ敵が攻撃しかけてくるかわからない状況下では、埋葬といえども、迅速だけが強調されていたからだ。それに、戦死者がぼう大で、こともなげに埋葬せざるをえなかったためもある。だが、くり返しになるが、白井の場合は違っていた。白井の戦死は、リンカン大隊の兵士たちに大きな欠落感を与えたのは事実のようだ。ちなみに、一九三七年八月九日付の第一五国際旅団機関誌『自由のための義勇兵』には、「このことは忘れまい」と題する詩が載っている。筆者は、ウィリアム・P・スミス・Jr(リンカン大

隊所属)である。

私は聞いた、その夜の君らの嗚咽を。

私は知っている、君らの涙は恐怖のためではなく、

死者のためなのを。君らとともに終日戦った同志が死んだ。

なかば判断力を失わせる熱い太陽の下で、

オリーブの根元の小麦畑で、同志は斃れた。

地獄の音と濁き、砲弾と弾丸の

飛び交う音と炸裂音の中で、

同志はやって来た。

水ぶくれの脚や肩をかかめ、

故郷でのんびりと暮らしたいと気まぐれに考えても、

泣かねばならない。何故なら、オリバーもジャックもはやいないからだ。

この二人をつれ戻すことはできない。

二人はどこか遠い所に連れ去られ、

生き返えることはあるまい。

だが、つぎのことを忘れまい——二人は今だ兵士として生きている。

何故なら、二人が残した力を受け継ぎ、

二人が決めた目標へ向かねばならないからだ。

より大きな団結とともに

全て人間は今や自由でなければならぬ。

私は聞いている、その夜の君らの嗚咽を、

だが、日中には、われわれも二人と同じくなる

そのことは忘れまい。

白井の戦死後も、激しい戦闘が続いた。敵は猛砲撃を加えてきた。夜間には、はるか頭上に陣取っているモーロ人部隊が、「アララー、アララー」と叫びとも唸りともつかない、不気味な声を発していた。アメリカ人兵士のなかには、両手で耳を押さえる者もいた。

七月一三日、スペイン人大隊の交替によって、アメリカ人両大隊に撤退命令が下達された。両大隊はグアダララの西側へ撤退し、休憩することになった。とはいっても、実際には、休憩などほとんどなかった。敵の攻撃にさらされている前線へ三回も救援作戦に出撃しなければならなかったからである。

それにしても、両大隊の再編制を計る必要があった。驚くべき戦死者を出したからだった。わずが八日間で、約八〇〇人のアメリカ人兵士が五〇〇人近くになっていた。そのうち、約一〇〇〇人が負傷兵だった。結局、戦闘に耐える戦力は半分に激減していた。新兵の補充はもはや不可能であり、兵力を維持するために、リンカン大隊とワシントン大隊が合併し、リンカン・ワシントン大隊と命名された。指揮官にマルコヴィッチ、政治委員にネルソンが就任した。

イギリス人大隊も撤退した。彼らの戦死者は、アメリカ人両大隊の比ではなかった。六〇〇人のうち、一八五人しか残っていなかった。イギリス人大隊は、ハラマ河の戦闘と同様、敵の攻撃の矢面に立たされ、しかも旅団指令部と悶着を起こしてしまった。モスキート・クレストの全面攻撃の日、イギリス人大隊はモスキート・クレスト

の南端側面を占領する命令を受けた。敵から夾又砲撃をうけ、しかも味方の掩護からは離れすぎていた。政治委員のウォリー・タブセルが旅団司令部に窮情を訴えるために出頭した。ところが、彼は逮捕されてしまった、彼が戻らないのを知って、大隊長のフレット・コープマンが自ら事情調査のために司令部に出かけることになり、出発に際して、もし自分が二時間たって戻って来なかったら、重装備の機関銃中隊を司令部へ向かせるよう、中隊指揮官に命令した。結局、大隊と旅団司令部とのトラブルは事なきをえたが、その間、約一割強の戦死者を出してしまった。以降、大隊幹部と旅団司令部とのこのようなトラブルは起らなくなった。

七月一七日、衛生トラックがやってきた。シャワーを浴び、下着を取り代えた。実に二週間ぶりであった。敵機が飛んできたが、何ら被害はなかった。

七月一八日、グアダラマ川から約一〇キロ北方の村、ビリャヌエバ・デル・ペルディリョの共和国軍の戦線が突破されるといふ伝令が伝えられた。新しく増援部隊をえたフランコ軍のブルネテ全域にわたる大規模な反攻作戦が開始された。リンカンワシントン大隊は、ペルディリョ村を確保するために急遽出撃することになった。

輸送手段は全くなかった。彼らは一晩中雨降まで砂でうまる川床を行軍しなければならなかった。砂を靴の中に入れていように、足首をひもでしばる者もいたし、靴をぬいで裸足で歩く者もいた。砂は皮膚にくい込み、水ぶくれを破った。ともかく骨の折れる行軍だった。行軍の先頭が止ると、後続の兵士たちがよるよると腰をおろし、寝込んでしまった。将校たちが、蹴ったりびびったりして起こしまわった。寝ながら行軍することをおぼえた者もいた。

夜明に彼らは川床からはい上って。朝食に、二個のゆで卵が支給された。これはスペインで、最初にして最後のゆで卵であった。カニャーダ村からペルディリョ村へ進む道路で、停車している急救車に寄りかかった若く美しい、ショートカットのイギリス人の女性が、通過する兵士たちに微笑ほほえかけていた。彼女は、彼らにとって二週間ぶりに見る女性だったが、誰も口笛などを鳴らす者はいなかった。

ペルディリョ村の一キロ手前の窪地に集結した。森ははるか後方にあり、前方は大麥畑だけで、遮蔽物は全くな

かった。何の命令もなかったもので、この日の大半をこの窪地でごろりと過した。ときたま砲撃されるだけだったためか、久しぶりにさまざまな話に花が咲いた。

突然、約一〇〇メートル離れたところに一発の砲弾が炸裂した。この窪地にいれば、安全だと分っているも、雑談は止めてしまった。はるか頭上に、小さな点が浮んでいた。敵の偵察機だった。誰もが頭をかかえてうずくまっていた。その飛行機は飛び去った。三分後、脱穀機のような音が頭上でした。今度は爆撃機だった。数秒後、爆撃機は爆弾を勝手気儘に投下した。大地は轟音とともに激しく揺れた。まるで地震と火山が同時に起こったようだった。突中高く吹き飛ばされると思ったほどだった。吹き飛ばされまいとして、草をわしずかみする者もいた。その後、榴散弾の破片が飛んできて、草が燃えあがった。黒い煙が舞い上り、紐状無煙火薬のイオウの臭いで窒息しそうになるほどだった。同時に、フランコ軍の歩兵部隊が一斉に攻撃をしかけてきた。リンカンIIワシントン大隊が機関銃で反撃し、追い散らしてしまった。

七月二〇日、この日からフランコ軍の主力部隊はブルネテ村の攻撃に転じ、リンカンIIワシントン大隊の陣地は比較的穏かになった。時たま敵機が襲来したが、何の損害も受けなかった。この頃から、リンカンIIワシントン大隊が、リンカン大隊と呼ばれるようになった。出来たての熱い食事にもありつけたし、アメリカの「エイブラム・リンカン友の会」から送られたチョコレートやタバコも前線の兵士たちに差し入れられた。午後三時、空中戦があった。フランコ軍機が一機、黒煙をあげて墜落した。この空中戦は三分位で終わった。

七月二一日、前線は平穏そのものだった。時たま狙撃兵の銃弾が飛び込むだけだった。

七月二三日、リンカン大隊に、モスキート・クレストの下のもとの陣地に戻る命令が下達された。再び、真暗闇のなか、グアダラマ川の川床を引きずるように行軍した。翌朝、川岸の藤の茂みの中で寝てコーヒーを回し飲みしていると、後退するスペイン人部隊が、敵が戦線を突破し、こちらの方向に進撃してくると知らせてくれた。リンカン大隊は直ちに斥候を出した。やはりその通りだった。慎重に態勢を固め、対岸まで進撃してきたフランコ軍に発砲した。フランコ軍がもとの戦線に押し戻されたが、緒戦で確保した陣地を奪取するのは問題外であった。午後

になって、共和国軍の三台の戦車が掩護に到着した。両軍とも激しい戦闘をくり広げたが、もうこれ以上の進軍は望めなかった。敵機が焼夷弾を投下した。乾燥した草や藤が猛烈に焼えあがった。戦闘の主力はカニヤダ村へ移っていった。次の二日間、リンカン大隊は防御陣を敷くことにやっきとなっていた。リンカン大隊の両翼を守っていたスペイン人部隊がいつの間にか戦線からいなくなっていた。だが、リンカン大隊は、混乱とパニックおちいらずに、徐々に撤退したのである。

リンカン大隊の八キロ南西に、地上三〇〇メートルもの黒煙が激しい勢いでのぼっていた。ブルネテ村が全焼していた。黒煙と黄土の塵土の彼方に見える太陽は、「血染めの玉」のようだった。フランコ軍機の方向舵に描かれている黒十字架が肉眼ではっきり見えた。完全に制空権を握っていた。フランコ軍が着実に前進してきたので、共和国軍司令部はカニヤダ村を最前線として構築することに決定した。激戦が続き、七月二五日の夕方、リンカン大隊が救出された。月明りのもとで、不気味に積み重ねられた石の壁づたいに縦列で後方へと撤退した。一九日前には、この村を制圧するために地獄のような溪谷へと突撃して行った。今や、あの時点での八〇〇人の精鋭のうち、わずかに三〇〇人しか残っていないのである。彼らは、この破壊され尽した村の中をとほとほと歩いて行った。

日中頃には、ヴァルデモリリオ村近くの曲りくねった小道に到着した。丘の上のヴァルデモリリオ村を目ざしてリンカン大隊が喘ぎつつ登って行くと、村の方から千人単位の味方の歩兵部隊が意気揚々とおりにてきた。こうした蹠のそったばかりの兵士と比べると、自分たちはライフル銃を杖に使う浮浪者のようにみえた、とあるアメリカ人義勇兵は回想している。

一二機のユンカー機が深い谷の彼方から二筋の道をたどって飛んできた。台地に備えつけられている対空高射砲が火を吹いた。パニックにおそわれた兵士たちが溝や崖に身を隠した。突然、指揮機がオレンジ色の炎と黒煙を吹き出しゆっくりと、さながら落葉する葉のように落ちていった。他のユンカー機はあわてふためいて向きを変え、誰もいない野原に爆弾を投下して飛び去っていった。

丘のあちこちにへばりついていた何千人もの共和国軍の兵士たちは、この一発必殺の射撃に大いに喝采を送った。

「真珠の門」の近くに、山から湧き出た冷たい小川がちょろちょろと流れ、池をつくっていた。その池の囲りにポプラの樹が繁い茂り、太陽の光線をさえぎっていた。

緑の草、おいしい水、リンカン大隊はグアダラマ川が完全に干えあがって以来、はじめて流れる小川を見たのだった。この場所を野営地にした。はるか下手の方では、ブルネテ村の戦闘が断続的に続いていた。だが、戦闘の勢いからして、ほぼ終わりに近づいていることは誰の目にもはっきりしていた。

「真珠の門」の二晩目に、新しい命令が下達された。それによると、キホルナ村付近の共和国軍は完全に包囲されている。第一五国際旅団が救援するには最短距離にいる。引き返して救出せよ、という命令だった。直ちに第一五国際旅団の高級参謀会議が開かれた。明確にこの命令を拒否する指揮官もいた。例えば、リンカン大隊の指揮官マルコヴィッツはこの救出作戦は無意味であり、自分の部下に命令することはできないと断言した。彼は「臆病者」として、指揮官の任を解かれた。マルコヴィッツの更迭人事については、リンカン大隊の兵士には説明されなかった。第一五国際旅団の各大隊の集合で、四分一近くの兵士が前線へ戻ることを頑なに拒否した。

リンカン大隊の説得にあたったネルソンは、小さな森で大隊の集会を開いた。諄々とさとするような話し方で、現況を伝えた。

ネルソンは野次と呪いの言葉がはね返ってくる予想していた。重苦しい沈黙の中から、ようやく、一言、「その通りだ」との発言があった。兵士たちは各々の装備をまとめ、農場の白く塗った門を通って行軍を開始した。途中で、前線急派兵のオートバイが、ネルソンに命令書を手渡した。「スペイン人の同志たちは急場をきりぬけ、局面を維持している。第一五国際旅団は現在地の陣地にとどまれ」という内容だった。

七月二六日、リンカン大隊の兵士をアルバレス村へ輸送するトラックがやって来た。

リンカン大隊は、ブルネテの戦線をあとにした。

共和国軍が、ほぼ最初の出撃地点に近いところまで戻って、ブルネテの戦闘は終わった。他の多く戦闘と同様、両陣営とも、おごそかに勝利宣言を発表した。攻撃側である共和国軍は、推定戦死者数二万三〇〇〇人、戦闘機と爆撃機の損失はほぼ一〇〇機などの犠牲を払い、一六キロの戦線にそって七キロ地域を獲得した。しかし、所期の目的であるマドリッド包囲網を打破することもバスク共和国の戦線にもそれほど影響を与えることができなかった。一方、フランコ軍は、一万七〇〇〇人の兵士と二三機の戦闘機と爆撃機を失ない、北部のサンタンデル攻略を延期せざるをえなかったが、マドリッド包囲網はそのまま確保することができた。この戦果からして、共和国軍の敗北とみるべきであろう。

この戦闘が共和国軍に兵員と兵器の甚大な損失をもたらし、しかも決定的な勝利を収めたわけではなかった。従って、共和国陣営において、政治と軍事の両面で主導権を握っていた共産党に対する不満や怨嗟の声が湧きあがった。

国際旅団も甚大な損害をこうむった。国際旅団の兵士のあいだでも、指導部に対する不満が鬱積していった。主にポーランド人とスラブ人義勇兵で編成されていた第一三国際旅団（ドンブロフスキー旅団）の兵士たちは、頑として前線復帰を拒絶した。そのため、敵前逃亡とか上官抵抗とかいった廉で銃殺されるような不幸な事態が発生した。また、上官が、部下の兵士を上官抵抗の廉で銃殺したとたん、上官自身が激昂した兵士たちによってあやうく殺されそうになることもあった。こうした叛乱兵士に対して、結局、武力で押えつけるより方法がなかった。

勿論、リンカン大隊の中にも、上官抵抗、脱走未遂などの兵士もいた。彼らは直ちに「再教育キャンプ」送りとなった。

ともあれ、炎熱下の乾燥しきったスペイン中央部において、両陣営とも五万ずつの兵力を投入し、わずか二〇日間で、両軍あわせて約四万人もの戦死者を出したこのブルネテの戦闘は、スペイン戦争の数ある激戦のなかでも最も凄惨な戦闘の一つであったろう。

従って、この戦闘の激しさが外国の新聞に載り、あらためて義勇兵派遣反対のキャンペーンが各国に広まり、ま

たほぼ同時に、あの忌しい五月のバルセロナの市街戦の概略も外国に伝わり、共和国の信用が失墜するといった、共和国にとって雲行のあやしい状況が生まれてきた。

こうした状況に最もあわてたのはソ連であったろう。ブルネテの戦闘で使用された飛行機や戦車、野砲や機関銃のはほぼ全てを供給したソ連は、この戦闘の敗北の説明をガル將軍に求めた。モスクワでガル將軍を待ちうけていたのは、あの大粛清であった。

ブルネテの戦闘を契機として、それ以降の戦闘は、共和国軍の先制攻撃、緒戦の勝利、後退と徹退、そして敗北というパターンとなった。

ジャック白井は、このような戦闘であえなく斃れたのである。

注

(1) Steve Nelson, *The Volunteers: A personal narrative of the fight against fascism in Spain*, New York, Marsess

& Mainstream, 1953. (邦訳『義勇兵』松本正雄訳、新日本出版社、一九六九年)

(2) 石垣綾子『オリープの墓標』(立風書房、一九七〇年)の増補改訂版。

(3) 拙稿「日本人義勇兵ジャック・白井の文献学的研究」『法政大学社会問題研究資料月報』第二八五号、一九八二年四月。

(4) 深澤安博「スペイン内戦と日中戦争——日・西外務省文書を中心に——」『歴史評論』(一九八七年七月号)の後注(65)に、白井について触れている。以下に全文を引用すると——

なお、スペイン内戦での第一五国際旅団の新聞『我らの闘い』(*Our Fight, Notre Combat, Nuestro Combate*)一九三七年八月一九日号に、その前月ブルネテで戦死した日本人義勇兵ジャック・白井の「思い出」が載せられている(E・B署名)。それによると、ジャック・白井はスペインで闘った「日本人反ファシストのうちの一人」で、アメリカで日本軍国主義反対の運動をおこない、また、日本に渡って日本帝国主義に反対する日本の組織を試み、そのために軍隊にまで入りこんだことがあるという。ジャック・白井のアメリカでの日本軍国主義反対運動とスペイン行きとの関係は強調されるべきであるが、日本での活動の部分は、事実としてそのまま受け入れるかどうか。

- (5) 拙稿「マドリッド再見」『公明』一九八六年二月号。
- (6) *The Veterans of the Abraham Lincoln Brigade.*
- (7) James Yeats, *From Mississippi to Madrid*, New York, 1986.
- (8) 例えば、同様なことが、初期のイギリス人義勇兵ジョン・ソマーフィールドも回想録『スペインの義勇兵』（一九三七年）のなかで述べている。以下に引用すると――
- 出発の日、兵舎の中庭に中隊単位に整列させられた。イギリス人義勇兵の配属先は、マルチ大隊だったが、どの中隊にも配属させられていなかった。それで、大隊付信号通信兵、伝令、事務要員など、戦闘に役立たずを集めた、どうでもよいと思われる非戦闘班にくっついた。われわれイギリス人義勇兵は、自らの大隊での立場を痛切に感じたものだった（邦訳、『スペインの義勇兵』川成洋訳、彩流社、一九八一年、六二頁）。
- (9) 主で参照した文献は左記の通り。
- Arthur H. Landis, *The Abraham Lincoln Brigade*, New York, The Citadel Press, 1967.
- Edwin Rolfe, *The Lincoln Battalion: The story of the Americans who fought in Spain in the International Brigades*, New York, Veterans of the Abraham Lincoln Brigade, 1936.
- Cecil Eby, *Between the Bullet and the Lie: American Volunteers in the Spanish Civil War*, New York, Holt, Rinehart and Winston, 1969.
- Fred Copeman, *Reason in Revolt*, London, Blandford Press, 1948.
- Vicent Brome, *The International Brigade: Spain 1936-1939*, London, Heineman, 1965.
- The Commissariat of War, XV Brigade, *The Book of the XV Brigade: Records of British, American, Canadian, and Irish Volunteers in the XV International Brigade in Spain 1936-1938*, Madrid, The Commissariat of War, XV Brigade, 1938.
- William Rust, *Britons in Spain: The History of the British Battalion of the XVth International Brigade*, London, Lawrence & Wishart, 1939.

Bill Alexander, *British Volunteers for Liberty : Spain 1936-1939*, London, Lawrence & Wishart, 1982.

Michael O'Riordan, *Connolly Column : The Story of the Irishmen who fought for the Spanish Republic 1936-1939*. Dublin, New Books, 1979.

Alvah Bessie, *Men in Battle : A Story of Americans in Spain*, San Francisco, Chandler & Sharp Publishers, 1939.